



なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No.19

危機的な状況の時にこそ優しさを (優しさを先に)

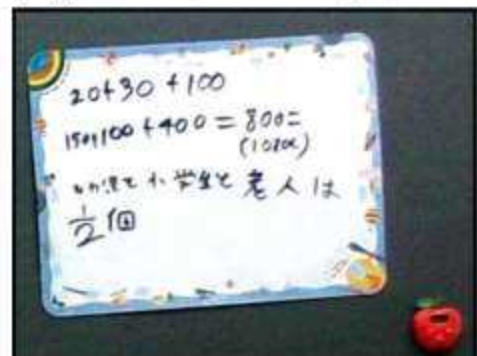
1学期の最後の授業でグループ学習をしました。久しぶりのグループ学習でしたが、どのクラスでも活発に意見交換ができました。

テーマは「避難所に届けられた800個の弁当をどのように配るべきか」でした。授業中に「解答」を示しませんでしたので、この「なんでやねん」で伝えておきます。

あるクラスでは、「手続きの公正さを大切にするために、世帯ごとに代表者が会議に出て、世帯ごとに弁当を配る」という意見もありました。ちなみに、この場合は世帯数を調べる必要があることをふまえておくべきでしょう。また、現実には、一人暮らしの人や、一人世帯の高齢者をどのようにして把握するかという問題もあります。

どのクラスでも、多くのグループでは、配分方法で議論が分かれました。「世帯人数に応じて配る」「全部の弁当を1つにして、均等に分ける」「おにぎりにして人数分に分ける」「年齢に応じて食べる量を決める」など、様々なアイデアが提案されていました。いずれも根拠はありそうですし、実行可能であれば、公平な分け方のように考えられます。

そんな中で、6クラス中1つのグループだけが明快な計算方法にたどり着きました。右のボードに書かれた計算方法です。作れるんですね。計算式が。



明確な「正解」はありません。しかし、効率と公正の基準を満たしつつ、実現可能な解決方法を考えることはできます。

参考意見として「一つの解答例」を紹介しておきましょう。まず、問題点は、避難所にいる人数よりも弁当の数が少ないことです。誰かが我慢しないと弁当は配れません。しかし、君たちには「がまん」という言葉を使っている人は、ほとんどいませんでした。けれども、「がまん」は、誰が、どの程度するのか、大切な判断基準です。

結果の公正さを検討する際に、基準になるのは「弱者優先」が公正な考え方です。次に、公平に分けるためには、生存のための必要量はどれくらいかという基準を参考にします。もし、生存のための必要量が満たせない場合は、誰が「がまんする」のか、みんなで平等に「がまんする」のかという選択肢を考えることになります。

さて、避難所で最も弱いのは乳児です。水がない所では、母乳だけが命の綱にな

ります。命を守るため、乳児を抱えた20人の母親に優先的に弁当を食べてもらいます(20個)。必要量の少ない幼児(60人)と高齢者(300人)には、2人で1つの弁当を食べてもらいます($360人 \times 1/2 = 180$ 個)。同じように、小学生(200人)にも、2人に1つの弁当で「がまん」してもらおう($200 \times 1/2 = 100$ 個)と、中学生(100人)と高校生と大人(400人)は、1人1個の弁当(500個)を食べることができます。その代わりに、中学生・高校生・大人には、避難所運営に必要な重労働を負担してもらいます。

今回のグループ学習の場面設定は、私(倉橋)が実際に遭遇した阪神淡路大震災(1995年1月)の際の被災経験と、各地に設けられた避難所での経験を基にして考えました。

真冬の厳しい寒さの中で、避難所の人々は、届けられた「1個のおにぎり」を分け合って、空腹をしのぎました。ストーブもなく、水洗トイレも使えない日々が続きました。それでも、阪神間の町々は次第に元気を取り戻し、現在の姿に復活しました。互いに気遣い、弱い立場の人の保護を最優先にして立ち上がってきたのです。

もしも、あの時「強い者優先」だったら、町は復興せずに崩壊に向かったでしょう。欲しい物を互いに奪い合い、争いが絶えなくなるからです。やがて、町は恨みや感情の対立ばかりが支配し、協力しあう関係は築けなかったに違いありません。

危機的な状況に立たされたとき、私たちは協力し合うことで生き延びることを学びました。人々を結び、協力し合う心を強くさせたのは、弱者優先・優しさという公正の考え方だったように私は思います。私たちは、一人では生きていけないのです。

グループ学習のボードには、4人分の意見を書こう

グループ学習の魅力は自分の意見と異なる意見に出会うことです。その場面は深い学びに至るチャンスです。たとえば、自分と意見の違う相手に説明をします。分かってもらおう方法を考える時に、新しい自分の意見が生まれることもあります。一人では考えつかないことにも出会います。友達の意見に刺激されて、自分の発想に変化が生まれ、思考が深まります。グループ学習では意見の違いを尊重し、互いに聞き合ひましょう。だから、ボードには4人分の意見を書くことが大切だと強調しています。

友達がいるから自分も成長できます。まさに「人間は社会的存在」なのです。

